

ライフサイエンスのエコシステム形成に必要なこと

青山 竜文

先般、「ライフサイエンスにおけるエコシステム形成の構図と創意工夫」というレポートを上梓した。医薬品や医療機器といったライフサイエンス分野は、そもそもリレーでバトンを渡すような形で、開発や製品上市、販売のフェーズ毎にプレイヤーが変遷していくという形がグローバル・スタンダードであり、「エコシステム」という概念との親和性も高い。そして、残念ながら日本はグローバルで見た場合、その枠組みのなかに入りきれていない。

その要因を掘り下げ、今後改善をしていくために必要な要素を探ることがレポートの目的であり、今回はレファランス先としてベルギーを選んだ。ベルギーは人口1,100万人ということで日本と規模感は異なるが、生産、雇用などで製薬分野における欧州随一の強さを見せるとともに、アカデミアからの研究・開発に関してもユニークな存在となっている。その強みを生み出す要因の一つがフランダース地域に所在するVIBという組織であり、これは「フランダースの5つの大学全てのバイオテクノロジー関連の研究活動を統合し、結果として単一組織のように運営する」というコンセプトで1996年に設立した組織である。

レポートではその組織を長らくリードしてきたJo Bury氏のインタビューも掲載しているのだが、彼の言葉で一番心に残ったのは「プロジェクトに投資をするのではなく、人に投資をすることが重要である」という点である。実際、ベルギーでもVIBが開始するまではプロジェクトベースでの資金付けが主流だったようなのだが、その方法からの成果が限定的であることを実感するなか、舵を切った方向性が「人への投資」である。

「人への投資」と一言でいうのは簡単だが、それはある種の「信任」ともいえるものであろう。5年の期間をその研究者に与え、そこでの成果を途中で区切ることなくしっかり見て、そのうえで継続させるものは継続をさせる。一方、その成果次第では外に出る人材も当然いるが、その多くは同じフランダースエリア内の大学や産業に従事をする。そうした人材の還流も大

きな特徴となってきた。

こうした成功をベルギーのワロン地域も別の形で追随し、また近時はベルギー国内にSolvay Brussels School内にアントレプレナープログラムが創設され、またEUバイオテックキャンパス（シニア層の再教育などの側面もあり）などの設立が準備されるなど、ベルギー全体として「人材育成」が一種のバズワードとなっている。

翻って日本の状況を考えると、サイエンス自体の強化、そしてその強化を起点とした社会実装、特に事業化への取り組み、そしてそのための人材育成をどう行うか、が重要である。

サイエンスとして成果を上げること（トップジャーナルへの掲載含め）と、事業化につながる開発のタネを見極め、育てていくことは必ずしも同一ではない。前者を押し進めるためには時間を要するが、そのための時間をしっかりと用意して、その成果がグローバルなキャリアパスにつながる道筋をつけつつ、その研究をサポートしうる支援の仕組みが必要となる。一方、後者については、「この開発シーズは一定期間で事業化につながる」という見極めを行い、臨床研究のデザイン段階から、そのための支援が出来る体制を組む、すなわちその後のプロセスをよく理解している人間の関与が必要である。

そして一番大きな課題が、ここで「必要である」と記した文章に「主語」がないことである。この文章にかかわりうる人間はアカデミア内にも当然点在しているし、各々の組織にも類する機能がある。また各種支援制度も、時間軸の課題はあるにしても「社会実装につなげる」という目線を有している。しかし、これがばらばらに行われると、結局、プロジェクト支援という結節点しか残らない形となり、継続的にこの分野に経験を有しながら関わっていく人材を残していくことから遠くなる。

当該レポートを端緒として、引き続き、その先の具体論を検討していきたい。